



[www.columnland.net](http://www.columnland.net)

1  
小さかった頃は

あんなにも簡単に

手を繋げたのに

## 手に潜むもの

今日ぼくはドアノブに手をかけ、家を出た。

今日ぼくはエレベーターのボタンを押した。

今日ぼくはつカードを手にし、改札を抜けた。

今日ぼくは電車に揺られ、つり革につかまった。

今日ぼくは世界の難民を救うため駅前で募金をした。

今日ぼくはともだちに借りていたノートを返した。

今日ぼくは先生に提出物を出せと促されたので、手渡した。

今日ぼくは食堂で茶碗をすっかり手に持ち、ごはんを食べた。

今日ぼくは体育の時間、ボールをすべてキャッチしファイナルと言われた。

今日ぼくは試合が終わり、選手たちと握手を交わした。

今日ぼくは買い物に行き、品を手にとり店の人に小銭を渡した。

今日ぼくは再びカードパネルにタッチし、改札を抜けた。

今日ぼくはボタンを何回押しただろうか。

今日ぼくはドアノブを回し家に入り、鍵をかけた。

世界中にはたくさんの「ぼく」がいる。

今日だけでどれだけの人が感染したであろうか？

ぼくは今日もこの手で公共のキーボードを打つ。

お題が手で

抜き

とはこれいかに

## ハンディキャップ

本当のこと。

「才能」なんてものは取るに足らないデタラメだってこと。今できないことの大半はなんとかなるってこと。もちろん一部にはとてもじゃないけど追いつけない天才はいるし、チーターより速く走るみたいなのは（たぶん）できないけどね。

訂正します。

「誰かができたなら、自分だって（いつかは）できる。」

ケイシー・ベイマー。彼は94年に3位になり、翌年2位。そして96年の大会でついにチャンピオンになった。その大会とはジャグリング。ちなみに彼は生まれながらにして左腕がない。

「片腕がないから評価が甘くなった」とか思うなら見てほしい。保証します。

片腕だということを感じさせない、それどころか普通の人よりずっとすごいジャグラーだってこと。

考えてごらん。

今、目の前にいるのは左腕が肘までしかないオジサン。右手にリングを3つ持ち、ポンポンと投げ始める。やがて数が4つになり、5つになって、やがて6つ目に手をつけ始める。

ほらね？

嘘じゃなかったでしょ？

人は決して他人と同一にはなれないと知りながら、孤独を恐れ、誰かを求める。そして誰かと「同じ」であることを求める。他人と「違う」ところを指摘され、仲間はずれになるのが怖い。だから大きな集団に帰属、いや、同化しようとする。そこでは考えることを放棄できる。難しい問題だって、誰かが答えを導きだしてくれる。答えが出ないとしても、みんなが頑張ってもダメなのだから、仕方ないかと安心できる。失敗したって誰かが励ましてくれる。こうしてキズを舐め合いながら、僕らは生きて行く。僕が今までしてきたのは、「僕ら」の意志に従うこと。ただそれだけ。

だって、しょうがないじゃないか。僕らは「人間」なのだから。人の間に生きる以上、人であり続けなければならぬ。僕には人から外されても生きて行くとする強い精神は持っていないかった。だから人から外されないように、僕は「僕ら」であろうとした。そのために、趣味を合わせたり、気を遣ったり、周りとの意見を合わせようと努力した。

そして僕は自分を見失った。望んだはずの「僕ら」は、だんだん息苦しくなった。それでも僕は「僕ら」から抜け出せなくなっていた。それどころか「僕ら」を失うことを必要以上に恐れていた。それはまるで麻薬のように。僕の意志を殺していれば、心地良い場が与えられる。一人になれば発作的に「僕ら」に手を伸ばす。偽りの快楽に気づいた時、僕は自己嫌悪に陥った。

あがいた。必死にあがいた。敵は弱い僕か、それとも「僕ら」か。でも辿り着いた答えは単純。強くなること、だ。

僕にできることは、弱さを認めること。これが強くなることの第一歩。そう、僕は弱い。

## だから僕らは手を繋ぐ

誰かと意見が同じでないと不安で仕方ない。他人と違う行動を取るのが怖くて仕方ない。だけど、もう一度ちゃんと考えてみよう。僕らは誰も孤独なんだ。決して交わることはない。意見なんて食い違うのが当たり前。完全に「同じ」なんてありえない。むしろ、誰もが完全に「違う」のだ。だったら「違う」ことを楽しんでしまえばいいじゃないか。もちろん、口で言うほど簡単ではないかもしれない。でも、「違う」ことを認めてくれる「仲間」がいれば、僕自身も「違う」ことを受け入れられる。まだ一人では大胆に行動できない僕だけど、そういう「仲間」がいたら、この弱さも少しは好きになれるかもしれない。

いくら手を伸ばそうとも、できるのはせいぜい手を繋ぐことだけ。マンガみたいに意志を共有したり、合体することはできない。でも、手を繋げるだけで十分じゃないか。手が触れ合う時、それは互いに互いを受け入れた証拠。僕らは、「僕ら」になんかなれないけど、僕らを認めることはできる。ふと思う。僕には「仲間」がいるだろうか。もしかしたらいないかもしれない。それでも構わない。僕が「仲間」になればいいだけだ。僕のように「違う」ことを恐れている人がいたのなら、そっと手を差し伸べよう。「僕ら」ではなく、僕らで手を繋ぎ、大きな輪を作ろう。その輪は、色や太さが不規則に変わる歪な輪になるだろう。でもそれは、どんなものにも負けないとても強い輪である証。

人は孤独な生き物。でも、この手で人と触れ合うことができる。互いに互いを確かめ合うことができる。これ以上、望むものなんて何も無い。

## 昔必要でも今はいらぬもの

どの生き物でも、ずっと昔に遡っていけば必ず祖先は水中の生き物である。

もちろん、人間もそうである。

ただ進化の過程でいらなくなった「えら」やら「しつぽ」などはなくなっていたり、小さくなっていたりする。

ちなみに母親のおなかの中で赤ちゃんが成長するときはその進化の過程が

もう一度行われているっていうようなことを

中学の理科の先生が話していたような気がする。

話は戻るが、

進化の過程でなくなったもので手の指の間にある「水かき」も含まれている。

「水かき」の場合はなくなっただけで言うよりも小さくなったんだが

それはもちろん人によって大きさが変わってくる。

ピアノストとかは、指がもつと開けるようになるために水かきのところを切って、

無くすって場合もある。

そんな今の時代にはいらぬ「水かき」。

どーもおれは、その「水かき」の部分がちよつと大きいらしい……

まあ俺は泳げないけど……（笑）



## 『M』の謎

謎のきつかけは物置の大掃除で見つけた小さな箱だった。年月の経過を感じさせるその薄汚れた箱の中には一つの指輪が収められていた。装飾のないシンプルなシルバーの指輪。それ自体は何の変哲もない普通の指輪だったが、私の目を引いたのは内側に刻まれた文字だった。そこにはこう刻まれていたのだ。

## 『Grand M』

指輪ということを考えれば、持ち主とその恋人のイニシャルなのだろう。問題は誰のイニシャルかということ。両親の名前は博史に敏子。『H』がお父さんだとしても、『M』に該当する人がいない。親戚にも『H』と『M』のペアはいなかったように思う。となると、お父さんの元カノ？ 私ってばとんでもないものを見つけちゃったのかも。

その夜、直接聞くわけにもいかず、なんとなく自分の部屋に持ってきてしまった指輪を弄びながら、一人、思考の海に沈みこむ。

「誰なんだろう、この『M』って」

やっぱりお父さんの元カノ？ でも、普通こういうのって取っておかない気が……。いや、男の人は捨てられずに持ち続けるってテレビでやっていたつけ。うーん、正直わからない。今度、それとなくお父さんに聞いてみようかな。

頭を使ったせいか、心地よい眠気が私を襲う。

「ふあ、明日、学校だしもう寝よ」

異変に気付いたのは帰宅後、自分の部屋に荷物を置きにいったときだった。机の上に置いてあったはずのあの箱がきれいさっぱり消えていた。

「朝、確かにここに置いていたのに」  
急いで階段を駆け下り、夕飯の準備をしていたお母さんに尋ねる。

「ねえ、机に小さな箱、なかった？」

「ああ、あれね。その棚の上よ。あんな、あんなのどこで見つけたのよ」  
見つけた、という表現にかすかな違和感を覚える。

「お母さん、あれ知ってるの？」

「ええ。あの指輪は付き合ってた1年の記念にお父さんにもらったのよ。ここに引越してきたときにどつかいにっちゃったんだけどね」

「えっ、でも、『H and M』って」

「ああ、あれはね、お母さんの旧姓が宮崎だったから、お父さんは宮ちゃんって呼んでくれてただけで、いつもそう呼んでたから間違えちゃったらしいのよねえ。今も昔もどつか抜けるんだから」

謎はあっけなく解決した。予想外の解答をもって。現実には小説より奇なりとはよく言うけど、なんか納得いかないなあ。ま、いいけど。

これにて一件落着。



ポケットのついた

あのコート着てくから

手袋はしてこないでね

僕はおそらく鬼のような形相で、あるいは人形のような無表情で、そんな解体作業を行っていた。

地面に広がってしまった血溜まりが黒く見えるのは、アスファルトの所為なのか、日が暮れた所為なのか……はたまた、時間経過による酸化の所為なのか。

でも、血はまだあつたかい。

血が流れているというのに、僕はそこに彼女の命を感じていた。だから僕は、まるで犬のように、彼女の腹に開いた穴に顔を突っ込んで、血を——生き血をすすり始めた。

「甘い、甘いよオ……」

謔言のように、戯言のように、僕は呟いた。

すすつていると、彼女の内側のぶにぶにとした柔肌ヤウダマに触れる。

おもむろに、僕はそれを噛みちぎった。

でも、我慢する。

僕と彼女は、一心同体なのだから。

……それは、初デートの時だっただろうか。

僕が死ぬ時が彼女の死ぬ時であり、彼女が死ぬ時が僕の死ぬ時なのだ。

僕らはいつでも、いつまでも、どこでだって、何があろうとも、一緒に、誓い合っていた。いつだって、手をつないでいたかった……。僕は、おかしな方向に曲がってしまった彼女

彼女が死ぬ時が僕の死ぬ時——だから、僕は  
 本当はすぐにでも死にたいのだ。でも、それは  
 出来ない相談だった。

僕らは、もう二人きりではなかったから。

……彼女のおなかの中には、新しい命が芽生えていたのだ。しかし、彼女はそれのいたいけな手を握ることは叶わない。ならば、親子で命運を共にすることを僕は思いついた。

臓物の中から引きずり出した、触手のような大腸を握り潰しながら掻き分ける。

——もうすぐだ。

みんなでおててをむすんであそぼうね。

ずっと、パパとママといっしょだからね。

……見つけた。僕ハ、ソレを――

何故か、涙と胃液が込み上げてきた。

実は、僕こっさり赤ちゃんの名前考えてたんだ……『命』と書いて、ミコト。いい名前だろう？　ずっと考えてたんだから……。

僕のおなかの中には、二つの命が宿っている。——これは、僕のけじめのようなものだから、ここからの行為を憶することだけはあつてはならない。

この世界で不幸な自動車事故が一体どれだけあるのか、僕は知らないけれど、それを目撃して、何も出来ずに、彼女は息絶えた。

何も出来ずに、彼女は息絶えた。

彼女が家の近くまで迎えに来て、手を振りながら僕に向かって走ってきた。何度も見た光景から、こんなにどす黒く——いや、美しくも無残な散華を迎えると、誰が思うだろう？

な散華を迎えると、誰が思うだろう？

居眠りしてたんだか何だか知らないが、彼女に突っ込んだトラックは、そのままコンビニエンスストアのガラス壁にまで突っ込んだ。

僕は——僕に出来たのは、絶叫だけ。

死後硬直だろうか——僕が彼女の手を握り直すと、彼女が握り返してくれたような気がした。

彼女が、きっと僕に勇気をくれたのだ。

僕は彼女の臓物を裂いたガラスの破片を、手に食い込むほどの力で握り締め、自分の首に突き刺した。――駄目だ、一回じゃあ全然足り

ない。僕はこれを、意識が途切れるまで、この命尽きるまで繰り返す。そう決めたのだから。

刺シテ刺シテ抉ツテ削ツテ切ツテ裂イテ

□

生きている手に触れる。  
ほのかなぬくもりに安心した。

病室に横たわる手に触れる。  
なぜか涙があふれた。

もう動かないしわしわの手に触れる。  
その冷たさに、これまでの感謝を込めて――

『伝わるもの、伝えるもの』

# コンテスト結果

| コラム番号 | コラムタイトル      | 点数                                                                                                                                                                                                         | 順位  | 特別賞  |
|-------|--------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----|------|
|       |              | まじょコメント                                                                                                                                                                                                    |     |      |
| 01    | (無題) 小さかった頃は | 11 pt                                                                                                                                                                                                      | 2 位 | 0 sp |
|       |              | 今期のスタートは、ほんのリノスタルジー。さっくり読み手の心をつかんでシルバー・メダルです、おめでとう！                                                                                                                                                        |     |      |
| 02    | 手に潜むもの       | 4 pt                                                                                                                                                                                                       | 5 位 | 1 sp |
|       |              | そっか感染かぁ。いいお話だと思ったのにダメされたあ。ひとつひとつのシーンがくっきり見えてくる親しみやすさが◎。<br>特別賞：感染賞（ダジャレを思いついてしまったから・・・）                                                                                                                    |     |      |
| 03    | (無題) 抜き      | 3 pt                                                                                                                                                                                                       | 6 位 | 3 sp |
|       |              | うん、きっと作者さんは、コラムってこんなにカンタンでいいのさ、というメッセージだったんですよ、ね！<br>■■■と並んで最多特別賞でした。<br>特別賞：手抜きはやめま賞（お題を非常に巧く作っています。） もっとがんばりま賞（手をぬいているから。） 手抜き賞（自信に満ちあふれている。手抜き）<br>イチオシフレーズ：「とはこれいかに～」                                  |     |      |
| 04    | ハンディキャップ     | 3 pt                                                                                                                                                                                                       | 6 位 | 0 sp |
|       |              | ジャグラー参上！ リズム感のつくりかたナイス。ラストの「考えてごらん」から先、ほんとうに目の前で演じているような〈絵〉が見えてきます。さすがマイク裁きも鮮やかでした。                                                                                                                        |     |      |
| 05    | だから僕らは手を繋ぐ   | 7 pt                                                                                                                                                                                                       | 4 位 | 1 sp |
|       |              | 自分自身の生き方を、ぐさりぐさりと鑿で掘り下げてゆくようなパワフルな思索です。<br>ちょっと前半の「もがき」部分が引っ張りすぎか（と作者さんも振り返ってましたが）。でも後半、ぐっと「手」が迫り出してきて説得力大でした。<br>カたくてぎっしりだったけれど4位まで上がったのは、読み手さんへの共鳴力の強さゆえでしょう。<br>特別賞：つなぎま賞（議長のセンス）<br>イチオシフレーズ：「人の間に生きる」 |     |      |
| 06    | 昔必要でも今はいらぬもの | 2 pt                                                                                                                                                                                                       | 9 位 | 0 sp |
|       |              | 手を見ていたら、ふっと思い浮かんだ水かきネタで。レイアウトの力に引っ張られて、だんだん話題に引き込まれていって、ラストで軽く（笑）へ。読み手の気持ちに添った心憎い構成でした。<br>イチオシフレーズ：「まあ俺は泳げないけど……（笑）」 「……（笑）」                                                                              |     |      |
| 07    | 『M』の謎        | 3 pt                                                                                                                                                                                                       | 6 位 | 0 sp |
|       |              | しっかり「Hand」を入れてきた。お題の使い方のうまさ光ります。                                                                                                                                                                           |     |      |

|    |             |                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|----|-------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|    |             | 夫婦の恋人時代を思わせるほんわかエピソード、安心できる読みごちです。<br>イチオシフレーズ：「HandM」                                                                                                                                                                                                                                                       |
| 08 | (無題) ポケット   | <div>17 pt1 位1 sp</div> <p>やったね☆ 首位！<br/>解説は要らないですね。<br/>クリスマスの頃に聞きたいセリフです。<br/>特別賞：季節はずれ賞（良い話だけど、時期外れ）<br/>イチオシフレーズ：「ポケットのついたあのコート着てくから手袋はしてこないでね」× 2</p>                                                                                                                                                   |
| 09 | 僕らの運命       | <div>0 pt10 位3 sp</div> <p>悲しみのするどいカタチ。<br/>ただのサディスティックじゃなくて、悲劇の果ての暴発というストーリーになっているところが、よりしっかり気持ちが伝わってきます。<br/>でもやっぱり食事前にはちょっと……<br/>「手抜き」と競っての最多特別賞でした。おめでとう。<br/>特別賞：えぐいで賞（ここまで、エグイのを書けるのはすごい。） 自主規制ありがとうございましたで賞（■■■はみたくない！）やり過ぎで賞（初回から飛ばし過ぎ）<br/>イチオシフレーズ：「僕ハ、ソレを——■■■。（食ベタ/飲ンダ）」「■■■・・・■■■」（さいごの一文）</p> |
| 10 | 伝わるもの、伝えるもの | <div>10 pt3 位1 sp</div> <p>手から伝わってくるもの。<br/>3つのシーンをコンパクトに並べて。特にラストが強い印象を刻みます。<br/>これをどんなストーリーでつなげるかは読者にゆだねられています、という余韻ゆたかな読み納め作品でした。おめでとう、ブロンズ・メダル！<br/>特別賞：病賞（重症理由）<br/>イチオシフレーズ：「伝わるもの、伝えるもの」</p>                                                                                                          |